

麦秋(ばくしゅう)は、〈むぎあき〉とも言います。初夏の頃、麦が熟し、麦にとっての収穫の「秋」であることから、名づけられた季節。麦の刈入時を指しています。

雨が少なく、乾燥した季節ですが、すぐ梅雨が始まるので、二毛作の農家にとって麦秋は短い。〈あき〉という言葉には百穀成熟の意味があるが、気象的にも空気が乾いて気持のよい陽気という意味で秋と共通性が多い。旧暦4月の旧称。歳時記では夏の季語。

七十二候の一つ小満の末候の呼び名。5月31日～6月4日ごろに相当する。元となった中国の宣明暦では「小暑至」と呼ばれ、「ようやく暑さが加わり始める」などといった意味である。

二十四節気の中でも小満は夏の節気で第八節気です、その意味は命が満ち満ちてくるころのため、つけられた節気名。爽やかな五月晴れもあれば、ぐずつく五月雨も。どちらも命を育む大切な贈り物です。

麦秋を含む小満の時期には「粽」を食する習慣があったようです。もち米などを笹の葉で三角形の形に巻いて、蒸して食べる料理がちまきです。日本には平安時代になって中国から入ってきたとされています。こうした料理は、東南アジアの各国でも見られます。ご飯ものの中華ちまきが有名ですが、日本では、中にあんこを入れた和菓子も作られていて、柏餅と並び、端午の節句に食べる習慣があります。また、葛餅や羊羹などを笹の葉でくるんだものも、ちまきと呼ぶことがあります。

この頃の植物にはバラがあります。外来種と思われがちですが、古くからわが国にも自生していました。サクラもバラ科に属しています。萬葉集にも詠われ、江戸時代には園芸品種の栽培も行われました。今は横須賀港のヴェルニー公園で、たくさんの種類のバラ約2000本が、大小さまざま、色とりどりに、きれいに咲いて見事です。